

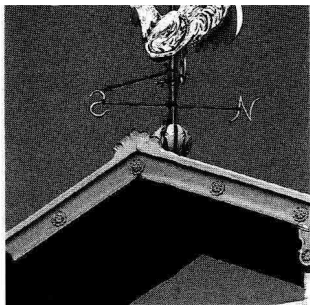
晴雨通信

1983年夏~1985年春

柴田 翔



筑摩書房



晴雨通信

1983年夏～1985年春

柴田 翔

柴田 翔（しばた・しょう）

1935年東京に生まれる。東京大学文学部教授。
独文学専攻。作家。著書に『されどわれらが
日々』（文藝春秋），『立ち盡す明日』（新潮
社），『燕のいる風景』『犬は空を飛ぶか』（共
に筑摩書房），『ゲーテ「ファウスト」を読む』
（岩波書店）などがある。

晴雨通信

1935年9月10日 初版第1刷発行

1985年10月10日 初版第2刷発行

著 者 柴田 翔

発行者 布川角左衛門

発行所 筑摩書房

東京都千代田区神田小川町2-8

郵便番号 101-91

電話 291-7651（営業）294-6711（編集）

振替 東京 6-4123

©1985 0095-82198-4604

印刷・多田印刷 製本・積信堂

晴雨通信◇もくじ

1	「気分」と「存在」と	7
2	テストとテレビ	17
3	生活とお話	26
4	三味線とモスキート	35
5	新劇の古さについて	45
6	擬制と暗黒大陸	55
7	平常心と熱狂	65
8	「えー」と「えっ」	75
9	韓国のカフカ	85
10	ブダペスト労働者運動記念館	94

11	メント・モリ	104
12	「衝動買わない」の考現学	113
13	近親相姦と寛容	122
14	疑惑・信頼・政治	132
15	角栄裁判弁護と近代の約束事	142
16	暖かい手の危険	151
17	センチメンタル・ジャーニー	160
18	マクドナルドの窓際で	169
補遺	「反核声明をめぐる」	178

あとがき

カバ―・扉写真 向田直幹

晴雨通信

——一九八三年夏——一九八五年春——

1 「気分」と「存在」と

今頃になって、『なんとなく、クリスタル』なる小説を読んだ。大兄はおそらく読んではいまいが、題名ぐらいは聞いているだろう。ぼくが今度読んだのは、文庫本になって目についたからだ。評判になった注つき小説の注の何たるかにも、始めてお目にかかったと書いても、世間では、そんな注のことなどもう忘れているかも知れない。小説自体のことだって、ああ、そんなものもあつたつけど、辛じて思い出してもらうくらいだろうか。

流行とは可笑しなものだ。三年足らず前に百万部売ったという小説が、もう人々の記憶の中で薄っすらとした影になりつつある。人々の心に何か波長が合えばこそ百万部売った

のだろうに。流行とはそういうものだと言えば簡単だし、三年前に波長が合ったからこそ、今では合わないのだとも言える。一人の個人史で三年とは決して短くない時間だとすれば、個人の集合体である社会にとっても、それが短かろうはずはない。「気分」という言葉を一躍流行語にしたのは多分この小説だったと思うが、まさにその「気分」なるものが移り変ったに違いない。

しかし、「気分」なるものに対し、言ってみれば「存在」なるものがあるとすれば、「気分」はその「存在」と全く無関係にありうるものだろうか。少くとも「気分」の波長が百万人の人間にサイフの口を開けさせた時には、その「気分」は「存在」からにじみ出している「気分」なのではあるまいか。そして、「気分」は変り、かつその変化の理由はなかなかつきとめがたいとしても、「存在」の方はそう簡単には変っていないのだろうという気がする。

ぼくがここでこの小説のことを持ち出しても、もちろん今更、由利なる女主人公の感性が結局は随分古くさいじゃないかと、筋の運びも常套だと、あれこれをあげつらうつもりではない。また、作者が主人公から距離をとっているふりしながら、結構その価値観を心地よく共有しているということも、まあ、どうでもいいことだ。問題は、この小説が百万部売ったということにおいて、その時代の「気分」を媒体として、つまりはぼくら

の時代の「存在」の在りようを映す鏡になっているということだ。

今更言うのも何だけど、この小説にはブランド商品がいっぱいに溢れている。音楽もひたひたまで、凡そブランド名と、それへの注で、この小説の気分と実質は成り立っていると言ってもよい。しかも、これはこの作者の無意識的方法として注目してもよいことだが、通常の注とは、至らざる読者の理解を助け本文と至らざる読者をつなぐ役割を担うものだが、この注はむしろそうした読者の理解をますます妨げ、本文とそうした読者とを隔離する役割を果している。別の言い方をすれば、この注はブランド名に溢れた本文を實體に結びつけるのではなく、逆に、更にブランド名で囲い込む機能を持っている。

つまり、本文のブランド名を知らないグサイ読者が注に助けを求めても、そこには更に理解不可能なブランド名や用語や気分が散りばめられているだけなのだ。この小説は終始ブランド名で成り立ったブランド宇宙、閉じたブランド空間だ。

だから、「気分」を支える重大要素であるはずの音楽さえもが、ここでは鳴り響かない。五木寛之大先生の初期の作品にジャズ小説とでも言うべきものがいくつあったが、あそこでは作者は、自分の聞いたジャズの音、その「フィーリング」を、言葉でもっと響かせようと四苦八苦していて、よかれ悪しかれ、それが作品の内実となっていたような気がする。しかしここでは、音楽の音は始めから対象外で、あるのは音楽のブランド名だけだ。

あるいは、作者は言うかも知れない。たとえばあるグループの名を言えば、判る奴にはもう判る。もう音楽が鳴ってくる。それで判らない奴はブランド宇宙の外にいる無縁の衆生だ、と。

無縁だという点はまさにそうだろう。しかし、ブランド宇宙の内側では音楽は本当に鳴っているのだろうか。ことによったら、鳴っているという共同幻想——ブランド名によって生み出された共同幻想——が内部の孤独な群集のひとりひとりに夢みられているのみで、実は死のような静寂が支配しているのではないのか。

またたとえば、スバゲッティの食べ方の話が出てくる。どういう食べ方がクリスタルで、どういふのがイモかというようなこと、つまり食べ方のブランドの高級低級を云々する訳だが、肝心の味の話は全く出てこない。ここにはスバゲッティは存在しない。それとともに、スバゲッティを食べる生の感覚は存在しない。

この小説を読んでいると、ブランド志向とは物自体からの疎外だということが、実によく判る。物にせよ、音楽にせよ、食べ物にせよ、このブランド宇宙には、物の実体はなく、物のブランド名があるだけだ。

さて、三年前の百万の読者がみなこうしたブランドに囲い込まれる生活をしていた訳でないことは自明だ。彼らは、それなり現実には鳴る音楽を聞き、それなり現実のスバゲッテ

イを食べていたはずだ。しかし、半ばの反撥をこめつつも、やはりおそらくは半ば以上の憧れとともにこの小説を読んでしまうというからには、個々のブランド名を知っているにせよ、知っていないにせよ、この小説を支配するブランド志向に共振するところが彼らの心のどこかにあつたに違いない。ブランドがブランドとして価値を持つという現象を追体験できなくては、この小説は全面的に崩壊する。それは逆に言えば、彼ら百万の読者のうちで、事物の実在性がそれだけ薄まっているということではあるまいか。

色いろと細かいことを言つたが、一言で言えば、ぼくはこのブランド小説が出現し、かつ百万部を売つたということは、ぼくらの社会における事物の実在性がよほど希薄になっていることの現われだという気がしている。そして、全頁に散りばめられた片カナは、もはや非在となつた事物の代替物として、生の空虚に対しキラビヤカに戦っている。あるいは、無意味に戦つていても同じだ。非在が非在を埋めようとしているのだから。

勿論、片カナのブランド名のキラビヤカな戦いは、時代の「気分」に支えられているから、「気分」の移り変つた今では、人々の氣をもうそんなに引きはしない。しかし、その根にある「存在」の在りよう、事物の実在性の希薄化は、数年で変る性質のものではないだろう。ブランド指向など阿呆らしいと笑い捨てることはできる。この小説のことも、風俗小説にさえなっていないと、忘れ去っていつこう構わない。だが、物自体に触れること

が困難になっているというわれわれの生活の根本的状況は、そう簡単に無視することはできないだろう。

さて、それと関連するのだが、先日、高史明氏の書いた自伝『少年の闇』を読んだ。こみち 怪書房の出したこの本は、小出版社の刊行なのに、随分書評にも取り上げられたし、実際それも当然だと思わせる重い実質に溢れた本だ。

在日の朝鮮人二世として生れ育った著者は、幼い自分を覆っていた時代の闇、政治の闇、環境の闇を、すべてわがうちなる闇として自らに引きうけ、それによって自らの苦闘と成長の跡を辿ろうとする。たとえば、銜氣にかられて身に彫った刺青を、われとわが手に握った焼き火箸で焼き消す場面の強烈な印象は、読む人の記憶に深く刻まれるだろうし、また闇から闇へと辿る行路のうちに現れる時折の明るい状況は、人間への信頼を呼び起こすに足る力を持つ。あれこれ論じても結局は軽薄な生活を軽薄に描いたに過ぎない『なんとなく、クリスタル』を、この本と並べて論ずること自体が、いささか軽薄なのではないかと思えてくるくらいだ。

けれども、この本を感動して読みながらも、ぼくはふと、その感動は自分にとって何を意味するのだろうかと考え込むところがある。ぼくは自分の感動が決して装われたもので

ないこと、自分が何かの建前に義理を立てて感動しているつもりになっていないこととは、よく知っている。更に、ちょっと余計なことをつけ加えれば、ぼくは高さんを個人的に知っていて、凡そぼくの知っている男性のうちでもっとも色っぽい人だと思っていて（色っぽいというのを、女っぽいと誤解しないで欲しい。まさに男性として色っぽいのだ）、そのことが、この自伝で描かれる壮絶と言っている経験とどう関係しているかを考えることも、大いに興味があり、かつ楽しいことだ。けれども、それとは別のこととして、自分がこの本に感動しても、それで、自分をこの本に同化させては困る、必要なのはむしろ距離を計ることのはずだという気がする。つまり、自分が目の前にしている世界は、基本的には『なんとなく、クリスタル』を生み出す世界で、そのことを忘れて高さんの本に感動しては、やはり自分をだますことになるということだ。

もちろん、その二つを結びつける方法はいくつもある。たとえば日本帝国主義という概念を媒介物にする方法だ。しかし、そういう概念が、われわれの生活の实在性をますます希薄にすることは、戦後三十数年間に、もう厭というほど経験してきた。ぼくらは差し当たり、ブランド名が飛び交って物自体から疎外されているわれわれの世界のなかで、もう一度物自体を発見するすべを探さなければならない。

大島渚の『戦場のメリークリスマス』を見た。男の同性愛、俘虜收容所、東と西の文化論の三位一体的映画、あるいはそうなるはずだった映画だ。作者は俘虜收容所という場の圧力によって、同性愛が同性愛であるまま、東と西の文化衝突さえも超越する至高の愛と化する様を描こうとしている。ここで作者を支配しているのは、第二次大戦という現実の事件への関心では全くなく、もっぱら愛の形而上学だ。

そのこと自体が悪い訳では全くない。だが、愛の形而上学が展開され、検証されるのは、やはり現実の場であるはずだ。しかし、この映画に現実はない。

イギリスの軍人が二人、日本の軍人が二人出てくる。だが、その日本軍将校と下士官は、ひたすら西欧人の目で見られた限りの日本人だ。ということは、イギリス人たちも、西欧人の自己意識に映る限りのイギリス人だということだろう。そうした両者の間では、愛の形而上学は、見かけ上は実に見事に完結し、実際は無惨に崩壊している。これは一口に言って、ヨーロッパかおれの西欧崇拜映画だ。

ぼくは原作を読んでいないが、ドストエフスキの影響が強いことは一見して明らかだ。しかし、空砲による銃殺も、ドストエフスキ自身の似た体験とは違って、イギリス人将校に何の回心ももたらさない。そして、回心なく、ひたすら強気で恰好い彼は、彼を愛している日本人将校に対し、たとえ俘虜であっても徹底的に優越者の立場にいたのであ